

人びとのなかの冷戦： 想像がグローバルな現実となるとき

益 田 肇

目次

はじめに

1. 冷戦とは何だったのか：想像上の現実・社会的装置・人びとの日常戦争
 2. ミズーリ州・インディペンデンス
 3. 大陸横断の旅：マッカーシズムの見直し
 4. 中国：「鎮圧反革命運動」再考など
- 結語：社会的観点から冷戦世界を見直す

はじめに

足立研幾先生からメールを頂いたとき、正直かなり驚いた。いまの国際関係学部にも僕のことを知っている人がいるとは思えなかったからだ。

あるいは、文京洙先生なら覚えておられるかもしれない。というのは、僕は文先生が立命館で朝鮮語を開講されたまさにその年に国関に入学し、その開講したての朝鮮語を履修した、つまり先生にとっての一期生にあたるからだ。ただ、いかに深い学恩があるかという美談にはならない。僕はその朝鮮語を再履修した初めての学生でもあったからだ。当時の僕は、自転車にテントと寝袋を積み込んでモンゴルや中東諸国を旅したり、北アルプス、南アルプスをそれぞれ縦走したり、そうでなければ日がな小説を読みふけていたり、そういったことばかりに時間を費やしている学生だった。

「マスター、来週試験やからなあ。来てくれよ」と、いつのことか文先生に頼まれたのを覚えている。ただその試験に実際に出たのかどうか、よく覚えていない。それに出なかったから3年目の再履となったのか、それに出たから4年目を取らずに済んだのか、どちらだったのだろうか。だから仮に覚えておられたとしても、「ああ、あの出来の悪いあれか」というぐらいだ

と思う。それは、ゼミを担当していただいた山形英郎先生にしても同様だと思う。なんせ、ほとんど出席していなかったのだから。(山形先生もその後、名古屋大学に移られたと聞く)。

ともあれ、今から思えば、申し訳ないというか、もったいないことをしていたものだと思う。その後、思いがけず歴史を専攻することになり、文先生の『韓国現代史』や『済州島四・三事件』を手にとることになり、後に触れるように、いま書いている本では、戦前・戦後の在日朝鮮人を巡る状況をかなり深く扱おうと思っているからだ。あの時、もう少し真面目に勉強していれば、と最近よく思うのだが、あの時にはあれが必要だったのだろう、と思わなくもない。

国関卒業後は、新聞社勤務のちアメリカに渡った。カリフォルニアの高校では日本語教師。ワイオミング州のコミュニティーカレッジではフォトグラフィー専攻。その後、ニュージャージー州ラトガーズ大学に学士編入後、ようやく歴史学を専攻するようになり、ニューヨーク州イサカのコーネル大学で博士号。その後そのままシンガポール国立大学 (NUS) で教えるようになったため、つい最近になるまで日本の研究者とほとんど接点がなかった。だから、足立先生からメールを頂いたとき、とてもびっくりしたし、嬉しく思った。

ただ、連絡を頂いた段階で、三つの原稿の締切を抱えていて、しかも後に触れるように、“Reconceptualizing the Cold War: On-the-ground Experiences in Asia” という日本円にして総額 9000 万円近い巨大グラントが通ってしまい、そのため、ポスドク採用、PhD・MA 大学院生募集、ワークショップ企画などの業務に追われており、しかも、もちろん毎週の講義もあり、正直、新しい原稿が書ける気がしなかった。

それでも書いてみたいと思ったのには、二つの理由がある。一つは、さきに英語で出版した *Cold War Crucible: The Korean Conflict and the Postwar World* (Harvard University Press, 2015) が、『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となる時』(岩波書店) として日本語で出版されることが決まっており、自分の研究を日本語で考え直してみたかったということ。もう一つは、いかに不真面目な学生だったとはいえ、国関で過ごした 4 年間で、その後の生き方や研究方向にまったく無関係だとも思えなかったからだ。僕がそこで身につけたのは、具体的な知識とか、緻密な方法論とかではなく、むしろ、ものの見方とか態度とかいったものだと思う。例えば、次のようなことが挙げられるだろう：専門に縛られないこと。国境の枠に縛られないこと。そして、新しいアプローチを試すことに抵抗がないこと。こういった態度は、良くも悪くも国関の特徴だと思うし、今までの僕をかなり方向づけてきたと思う。

だからこれを引き受けたのは、20 年ほど前に国関で学んでいた学生が、その後、どうなって、何に興味を持つようになったのか、という近況報告を書いてみたかったこと、また、それを通して自分の研究を見つめ直してみようと思ったからだ。もちろん、この小論をきっかけに、このプロジェクトに興味を持っていただいて、日本語版が出版された際に拙著を手にとっていただけのならば、僕としてはそれが隠れた一番の狙いでもある。

1. 冷戦とは何だったのか：想像上の現実・社会的装置・人びとの日常戦争

まず2通の手紙を紹介したい。最初のもは、コネチカット州の高校生が書いた手紙で、1950年の夏にハリー・S・トルーマン大統領に送られたものだ。

私は単なる一高校生で、あなたはおそらくこの手紙を読むことはないと思います。でも、15歳の女の子がどれほど生きるチャンスを望んでいるのかわかってもらえるかと思いいてみました。私たち、米国が、ロシアに奇襲攻撃をかけることはできないでしょうか。彼らがそうする前に。(中略)。ある夜、ベッドで横になって眠れなかった時のことです。飛行機が上空を飛び去る音が聞こえたのです。その瞬間、私はしばしの恐怖にとらわれました。みんなが一瞬にして殺されるのではないかと。どうして、一か八か奇襲攻撃をかけてみないのですか。たとえ私たちが戦争に負けたとしても（もし手を打てばそうはならないと思いますが）、少なくとも私たちは試してはみた、ということではできません。私たちは素晴らしい国です。それがこれからもそのまま続くようにしていきましょう。

もう一つの手紙は、鳥取県米子市の58歳の男性医師が書いたもので、1951年の春、元総理大臣の芦田均に送られたものだ。

五月号主婦の友主催の再軍備座談会の記事に関し深く感ずるところあり一書を呈します。(…) 何人もあの記事を読んであまりにも無智無理解な彼女達の頭脳に匙を投げざるを得ないと思います。婦人が感情に走り時局の認識に無理解なることを指摘されて大いに憤慨しながら其口の下から非難の評言を如実に裏書きするような無智を其まま暴露しているのに驚かされます。か様な婦人達が時代の波に便乗して代議士だとか市長だとか堂々たる重職に就いている現代日本の社会と其軽佻浮薄な国民性に闇然たらざるを得ません。(中略)。憲法改正の国民投票については無智なる婦人の多数によって日本国民の良識を世界に誤解せしめるようなれば、御説の如く現行の儘、自由なる解釈の許に再軍備を行はるるようお願いしたいと思います。昔より歴史の裏に女ありと云ふ言葉の意味は常に滅亡と悲劇を意味するもので女性の政治的関与は積極的に効果を挙げた場合が極めて乏しく女賢くして牛を売り損なふ例は必ずしも東洋のみとは限りません。人道上女性に政治を禁ずる法律的措置は出来ないのですが女性の実際政治の重要ポストへの就任は非常に慎重なる考慮を要するものと思ひます。偶々日本の代表的婦人論客と視られるべき女性達の偽らざる意見と思想の真相を知る機会を得てあまりにも浅薄なる小児病的頭脳の程度を知り密かに

先生の心事を忖度し御同情申し上ぐると共に兼ねて公明なる先生の御持論に敬意を表する次第であります。再軍備反対論は要する 現実の状態に全々眼をふさぎたる純然たる空論に過ぎず私は彼らの良心の存在を疑わざるを得ません。

なぜこの手紙を先に紹介したかという、こうした種類の人びとの声こそが、僕が冷戦の分析に取り入れたいと思った一次史料だったからだ。ここでは詳細に触れないが、『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき』では大まかに言って下記のような史料を使っている。①新聞・雑誌記事、風刺漫画、読者の投稿；②普通の人びとが書いた手紙や日記；③世論調査、または警察・軍隊・情報機関などによる大衆感情調査報告書；④政治家や官僚らによる日記、書簡、メモ、覚書、外交文書など；⑤オーラルヒストリー史料。

一般的に言って、外交史家、冷戦史家は、ナショナル・アーカイブスや、大統領図書館などで収集することのできる四番目の史料に依拠しながら歴史像を描くことが多い。(むろん、それ自体は重要な作業であり、僕の本の中でも重要な位置を占めている)。しかし、僕がしたかったことは、むしろ、こうした多様な史料を統合することで、普通の人びとの声を冷戦研究に持ち込み、そこから、いかに彼らが冷戦世界の形成に参加していたかと考えることだった。それを通して、冷戦とは一体何だったのか問いかけ、そして、第二次世界大戦後のグローバルヒストリーを再考したかったからだ。

このように考えたのは、僕自身が、これまでの冷戦の歴史の描かれ方に十分に満足していなかったからだろう。外交史家たちは、冷戦のいわゆる「起源」の問題に焦点をあてる傾向にあり、一般的に言って、その研究は、政治家や官僚たちの考えや行動、また彼らの性格などの分析に集中しがちだった。他方では、社会史家、文化史家たちは、冷戦が社会や文化に与えた影響を探ることに重心を置いてきた。そこでは冷戦は、所与の条件、いわば変えることのできない「天気」のようなものして前提されがちだった。さらには、比較的最近までは、冷戦研究の大部分が、米国とヨーロッパを研究対象の主眼としてきた。そうしたなか、アジア研究の専門家たちが注目しがちだったのは、グローバルな紛争がアジアにどのような影響を与えたのかという問題設定から研究をすすめ、アジアにおける冷戦の「広がり」を探ってしまうことだった。

もちろんこうした研究にはそれぞれの長所があるだろうが、それでもこのような専門分野に基づく役割分担がこれまで続いてきたため、冷戦に関して、次のような先入観から離れることが意外と難しい。「政治指導者たちの判断と行為が、冷戦を作り上げた。その結果として、それは、当時の政治、社会、文化、人びとの生活に大きな影響を与えた」。「アジア、また日本も、そうしたグローバルな紛争の影響から免れ得なかった」——と。しかしこうした見方には、二つの問題がある。一つは、こうした見方が続くかぎり、政治状況というのは一部の政治家が作り上げるもので、文化や社会、人びとの生活は常に受け身の存在と見なし続けることになる。

ゆえに、その逆の可能性、つまり人びとの生活や当時の文化、社会が、いかに政治を条件づけて、冷戦世界の形成に貢献したかについて想像力が及ばない。

もう一つの問題は、冷戦がヨーロッパに始まり、それが世界に広まった、と見続けるかぎり、アジアは、歴史の受動的な「受領者」としてのみ描かれ続けることになる。ゆえに、アジアが、どのように冷戦世界形成に同時的に参与していたかについて考えることができない。別の言い方をすると、これまでの冷戦研究、そしてそれに基づいた冷戦理解には、指導者を中心とする社会観、また西洋を起点とする世界観を自然なことのように見なす姿勢が綿々と受け継がれている。だからこそ、より多くが検討され、語り直されなければならない。というのは、そうした理解は単なる社会通念、つまり一種の神話に過ぎないからだ。

『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき』はこうした姿勢に疑問を呈し、「冷戦」と私たちが考える現象に対して新しい見方を提示することを意図している。結論から言うと、本書は冷戦を第二次世界大戦後の米ソ超大国間の確執から生じた単なる国際的状況としてではなく、むしろ無数の人びとの日常的な行為によって構築された「想像上の現実」として描いている。中心的な問いは以下のようなものになる。どのようにして当初、ヨーロッパ情勢をめぐる言説でしかなかった冷戦が「現実」に変容したのか。どのように現実が想像され、どのようにその想像が現実となったのだろうか。なぜそうした一定の形の現実が必要だったのだろうか。

また冷戦という「現実」がなぜ必要だったのかを探る過程で、本書は冷戦の「社会的装置」としての性質を指摘し、それが戦後の混乱や社会内部の異論を封じ込めるという社会的機能を持っていた点を詳細に論じている。さらに、普通の人びとの声を冷戦分析に取り込むことで、冷戦を「人びとの日常戦争」と位置づけている。ここでは、人びとは、単なる冷戦の犠牲者でもなければ、抵抗のヒーロー／ヒロインでもなく、ときには残忍で、それこそ背筋の凍りつくような社会的粛清を国家防衛の名のもとで粛々と繰り広げるような「普通の」人びとでもあった。

こうした点からすれば、本書は冷戦の存在を当然の前提とし、そこから起源と影響を調査するようないわゆる「冷戦史」ではない。むしろ、そうした冷戦の虚構性と構築性、またそうした「現実」の社会的必要とその作用に焦点をあてることで、「冷戦という想像」の歴史、つまり想像がいかに現実を作り上げたか、を描いている。

よって本書での主要な関心は、冷戦がいつ始まったか、誰によって始められたかではなく、どのようにして冷戦の「現実」が定着したのか、また世界各地の多くの人びとがなぜそれを信じたのかを探ることにある。したがって本書では、いわゆる政策立案過程だけでなく、さまざまな地域の普通の人びとが何をどのように想像したか、またどのように冷戦世界の構築に参加したのかを描くことをねらっている。

そのため本書では、これまでの冷戦研究に見られない幾つかの新しいアプローチをとった。まずこれまで別個の分野として別々に研究されてきた社会史、文化史、外交史、政治史を融合させることで、これまで政治外交上の主題とされてきた冷戦を社会的、文化的な観点から再考している。そのように扱うことで、冷戦の歴史をいわゆる「偉大な人たち」を中心とする物語ではなく、むしろ普通の人びとの戦後史として描いた。

さらには米国、英国、カナダ、中国、香港、台湾、日本、インド、シンガポール、オーストラリアなどの58カ所もの図書館・史料館などで収集した膨大な資料をふんだんに使うことでアジア史、アメリカ史、ヨーロッパ史などといった従来の領域区分を意識的に避け、むしろそれぞれの地域で起きたことの関連性と同時性を探っている。つまり、本書はこのように社会史と外交史、ローカル史とグローバル史を総合的に組み合わせることで冷戦の本質を再考し、新しい冷戦像を描くことを目標にしている。

さいわい僕の試みはかなり好意的に受け止められてきた。英語版 *Cold War Crucible: The Korean Conflict and the Postwar World* に関しては、これまでに25本以上もの書評が書かれ、その多くが、この本の成功している点として、ミクロとマクロ、ローカルヒストリーとグローバルヒストリーをうまく結合させていることを挙げている。しかし、冷戦史分析に普通の人びとを取り込んだこと、そしてアジアを単なる受領者としてだけでなく同時的参画者として描いたことは、ただ単に異なる専門分野をうまくつなげたという学問的な貢献だけでなく、実は、もっと深い、より根源的な問いかけを含んでいる。それは、そもそも冷戦とは一体何だったのか、という大きな問いだ。

このシンプルな問いかけ——冷戦とは何だったのか——は、極めて重要な問題でありながらも、先に触れたように、近年になるまで、それほど真剣に扱われてこなかった。あまりに自明のことだと思われてきたからだ。冷戦とは何か。それは、第二次世界大戦後の米国とソ連のイデオロギー的、軍事的、経済的な対立に端を発する世界的な対立状況であり、それはヨーロッパで始まり、次いで、アジア、アフリカ、ラテンアメリカに広がり、ついには世界を二分するに至った世界史的な対立状況であった——と。こうした状況を作り上げた主体としては通常、政治家やエリート官僚、外交官、例えば、トルーマン、ディーン・アチソン、ジョージ・F・ケナン、または、チャーチル、スターリンたちの名前が挙げられるだろう。

しかし、こうした見方が当然のように思われるのは、我々が、「冷戦」の主要アクターを、国家、より厳密にはそのリーダーたちだ、と見なしているからだ。そもそも、我々は、20世紀の国際政治史を振り返る際、二度の世界大戦をみるにせよ、冷戦を見るにせよ、また脱植民地化のプロセスに注目するにせよ、国家とそのリーダーたちを中心に据えた見方に深く慣れすぎていて、それゆえ、冷戦を考える際にもそれが国家対立以外のなにものにも見えないようになってしまっている。

しかし、「人びとは冷戦世界で何をしていたのか」という問いを立てると、後に見るように、「誰が冷戦世界をつくったのか」という問いに対する答えが変わってしまう。そして、もしこの問いに対する答えが変わるのであれば、「冷戦は何だったのか」という問いに対する答えも再考されなければならないだろう。「何がその物事の主体だったのか」に対する答えが変わるのならば、その物事自体がそもそも何であったのか、に対する見方も変わらざるを得ないからだ。端的に言うと、ここで僕が言おうとしているのは、方法論における変化は単なる史料の付け足しにとどまらない。むしろ歴史の全体像の見直しにすらつながる、という点だと思う。

そこで、さきの問いに戻りたい。冷戦とは何だったのだろうか——。結論から言うならば、『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき』では、冷戦を、先に述べた三つの見方から再認識、再定義してみてもどうか、と問いかけている。それは「想像上の現実」「社会的装置」「人びとの日常戦争」——という視点だ。同書では、冷戦とは単なる国際的対立以上のもので、同時に社会の秩序とその純粹さの維持をめぐる社会的メカニズムでもあったと述べている。とくに冷戦論理のもとで拡大した世界各地における「社会的粛清」運動に焦点をあてることで、これらの粛清の共通項、例えば東西冷戦対立の論理がそれぞれの社会における異論や不和を封じ込めた点や、またそうすることによってその後長く続くことになる一定のタイプの社会秩序と社会的現実を作り上げた点などを指摘している。このように見ることで本書は、これらの冷戦下での社会的粛清運動を、単なるグローバル冷戦のローカルな結果としてではなく、むしろそうしたグローバル冷戦という想像を必要とし、作り上げたローカルな要因だったのではないかと指摘している。

要するに、同書が試みているのは、グローバル冷戦という想像を取り除き、それぞれの社会特有の問題に光を当てることであり、そうすることで、冷戦を米ソ超大国間の国際的対立とのみ定義する一般的な冷戦史観を揺さぶることである。ゆえに、僕は、同書の冒頭でこのように書いた。「冷戦をこのように再検討することで、この本は、次のような論点に関して、議論を呼び起こすことを願っている——なぜこのような「想像上の現実」が朝鮮戦争期に実体化したのか。なぜ世界中の何百万人もの人びとがこの「現実」の形成に参画したのか。そして、冷戦とはそもそも一体何であったのだろうか——」。

これらが、『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき』の中心的な問いかけと基本的論点となる。しかし、正直なところ、僕としても、最初からこういう議論を考えていたわけでは決してない。もし、こうした議論を聞いて、そのやや極端というか、あまりに野心的な設定に驚く人がいるとすれば、それはたぶん僕自身だと思う。というのは、2005年にこのプロジェクトを始めた時、これほど大掛かりな本を書くことになるとはまったく想像もしていなかったからだ。だから、この小論では、このプロジェクトがどのように始まり、その後どのように発展してきたかをたどることで、その議論を紹介していきたい。

2. ミズーリ州・インディペンデンス

このプロジェクトの最初のステップは、2005年12月にミズーリ州インディペンデンスにあるハリー・S・トルーマン大統領図書館から始まった。コーネル大学博士号課程に入学したその年のことだ。いまでは、多くの人が、僕のことをアジア史専門家もしくは日本史家、とくに社会史分野の歴史家として分類するかもしれないが、もともと僕はアメリカ史専攻、とくに外交史分野を専門としていた。実際のところ、博士課程を始めた初期の頃は、アメリカの朝鮮戦争戦略をめぐる外交史の論文を書こうと思っていた。もっと具体的に言うと、僕が興味を持っていたのは、なぜアメリカが、開戦当初の比較的慎重な姿勢を変更して、よりアグレッシブな政策を取ったのか、またなぜ当初否定していた三十八度線の北上に踏みきり、戦争をエスカレートさせてしまったのかということだった。

言うまでもなく、朝鮮戦争期のアメリカ外交戦略に関しては、これまでに多くの研究がある。しかし、そのほとんどが、一握りの政治家や政策立案者の行動や性格に焦点を当てたものか、または軍事的、地政学的なアプローチをとるものだった。ゆえに、国内政治の影響を考えたり、また普通の人びとがどのような形で関与したのかを考えたりするような研究は、あまりなかった。もちろん、国内政治は、いかなる政権にとっても、外交政策立案過程に重くのしかかるものだが、それはトルーマン政権にとっては特にそうだった。というのは、トルーマンは自らの民主党内ですら頼りない支持基盤しかなく、しかもその不安定な支持ですら、中国での共産党勝利、ソビエト連邦の核実験成功、そして何よりも朝鮮戦争の勃発を通して次第に弱まっていたからだ。さらにトルーマンの状況を難しくしていたのは、1950年が中間選挙の年だったことだ。そこで、アメリカの朝鮮戦争政策を考えるに当たって、僕は、トルーマン政権の外交戦略だけでなく、その国内政治と選挙キャンペーンを調査することになり、トルーマン政権の朝鮮戦争政策がいかにその選挙政策と密接に関わっていたかを示した。

そうするうちに、ここでリサーチを止めるわけにはいかない、という気がしてきた。国内政治と選挙運動、そして外交戦略のつながりを考えるうちに、もう一つの重要なトピックを無視するわけにもいかなかったからだ。それは、マッカーシズムと、米国史における反共主義の文化だ。マッカーシズムは、外交政策にどんな影響をもっていたのだろうか。広い意味では、文化と政治の間にどんな相互作用があるのだろうか。しかし、マッカーシズムをめぐる既存研究をいくら読んでも不満が募った。その多くが、あまりにもその「起源」の問題——つまり誰が始めたのか、そして誰がその責任を追うべきなのかといった道徳的問題設定——に捕らわれすぎていたと思えたし、それに関連して、共産主義の「脅威」があったのか、なかったのか、という二分法的見方に執着しすぎだと思ったからだ。正直なところ、僕は、誰が「始めた」のか

にはあまり興味がないし、ましてや、それが「(根も葉もない) 赤の恐怖」だったのか、「(真の) 赤の脅威」だったのか、そのどちらかを選ぶような議論にはまったく興味がない。

僕が知りたかったのは、誰が始めたのか、というよりも、誰がそれに飛びついたのか、誰がそれを使ったのか、ということだった。つまり、マッカーシーの前にも後にも、同じようなことを主張した人間はいくらでもいるわけで、それが、「マッカーシズム」として一世を風靡するようになったのは、マッカーシーがそれを叫んだからというよりも、むしろ、それに食らいついた無数の人びとがそこにいたからに他ならない。ゆえに僕にとっての核心的な問いは、むしろ、なぜ、「マッカーシズム」と呼ばれる現象が、この朝鮮戦争期というある瞬間的な時期、人口の大部分に受け入れられたのか、それは社会の中でどう作用したのか、また人びとは、それにどう適応して、どのように日常生活の中で利用したのか、という点だった。

こういう点を考えるために、博士課程初期の数年は特に、何十ものアメリカ各地の図書館や公文書館を旅しつづけることになった。大統領図書館などだけでなく、アフリカン・アメリカン運動、女性運動、労働運動、また保守反共運動などをテーマとする図書館も含めたため、アメリカだけでも 25 カ所のアーカイブスを旅することになった。ここでの基本的な問いは、誰が反共運動を始めたのか、ではなく、むしろ、それがどのように人びとの間で作用していたのか、ということ。もっと具体的に言えば、誰が誰を、何の目的で抑圧したのか、ということだった。(まったくの余談だが、このリサーチ旅行自体、僕にとっては楽しみのもとだった。自転車ではないにせよ自分の車で何度も大陸横断の旅を繰り返して、昔からの旅への願望を叶えていたのだから)。

3. 大陸横断の旅：マッカーシズムの見直し

ともあれ、この調査を通して浮かび上がってきた問いは、アメリカにおける「反共」主義とは、そもそも一体何なのか、ということだった。そして何よりも、「マッカーシズム」と一般に考えられている現象の本質を、もっと根本的に再考すべきではないか、という点だった。

もちろん 1950 年代後半から今日に至るまで、無数の研究者がこの現象についてさまざまな解説を加えてきた。近年では、「マッカーシズム」という名称自体が、正しくないのではないかと指摘することも研究者の間でも当然視されるようになってきている。その理由としては、①マッカーシズムと呼んでしまうことで、マッカーシーの役割を強調しすぎてしまい、共和党、民主党双方で、それぞれ役割を果たした他の政治家たちの役割を無視してしまう。同様に、② FBI など連邦政府機関が果たした役割を無視してしまう。また、③草の根レベルでの大衆的な広がりを見えにくくしてしまう。さらに、④「マッカーシズム」と名付けることで、この現象を一時的、例外的な出来事として描きがちで、米国史の中で長く続く「反共」政治文化の一環とし

て描く視点に欠ける。そして同時に、⑤マッカーシー自身よりも大きな役割を果たした朝鮮戦争のインパクトを見えにくくしてしまう——などという点が挙げられている。そういう意味では、今日の大多数の研究者は、歴史家マイケル・ヒールが指摘した点にほぼ同意していると言っていだろう。マッカーシー自身は、彼の名前がつけられるようになった現象のごく一部でしかない、と。

それでも、今日に至るまで、ほとんどすべての研究者が二つの前提を共有している。一つ、マッカーシズムとは反共政治である。二つ、マッカーシズムとはアメリカ史の出来事である——と。まず、マッカーシズムのことを、たとえ別の名前（例えば：“Cold War at Home,” “Second Red Scare,” “Korean War Red Scare” など）で呼び替えたとしても、基本的には、それを反共政治の現れとして捉えるのが一般的だ。しかし、この現象を反共政治の現れとして捉え続けることで、実はむしろ見えにくくなっている側面もある。例えば、多様な「社会戦争」や「文化戦争」を反共の名のもとに抑え込んださまざまな社会的抑圧がそれだ。そういったローカルな紛争には、例えば人種差別、労働争議、ジェンダーをめぐる抑圧など、戦後アメリカのさまざまな社会的・文化的緊張が含まれる。

実際、当時の反共論理に抑圧され、周縁化された人びとは何も共産主義者だけではない。「誰が誰を、何の目的で抑圧したのか」という視点から再考した際、明らかになるのは、当時の反共政治の犠牲者には、むしろ、アフリカン・アメリカン人、公民権運動家、労働運動家、フェミニスト、働く女性、ゲイ、レズビアン、さらには公共住宅政策や国民健康保険政策といった、いわゆるニューディール政策の推進者等等、さまざま人びとが含まれるということだった。これらのグループの人びとが共有しているのは、共産主義思想ではない。むしろ、彼らに共通するのは、そのいずれもが、当時のアメリカ社会における社会的・文化的変動を何らかの形で体現していたといったことだ。言い換えれば、大恐慌と第二次世界大戦に伴う大変化のなかに新しい生き方とか新しいアイデンティティを見つけた社会的新興勢力、と言える。

このように社会的見地から考えることで、次のような仮説を立てることができるだろう。マッカーシズムの本質は、実は、反共政治ではなくて、むしろ「反共」の名のもとに、国内で目に付きやすくなってきた社会変動や新しいアイデンティティを抑え込もうとした草の根保守主義のバックラッシュ（揺り戻し）ではないだろうか——と。実際、反共論理は、戦後アメリカにおけるさまざまな変化の要素を封じ込めるのに、とても「うまく」作用した。冷戦の「現実」は、便利だったところか、国内社会におけるさまざまな不同意や緊張を押さえ込み、周縁化しつづけるために、むしろ不可欠だったとも言える。このようにして、いくつかの研究領域を横断しながら研究を行うなか、僕は、マッカーシズムと呼ばれる現象を見直す作業を進めることになった。「国内における冷戦」という観点でもなく、「反共政治の歴史的伝統」という枠組みから捉えるのではなく、むしろ、急激な変化要因に対抗するかたちで発展した社会的抑圧の仕

組みとして捉えるようになった。その作用は、共産主義浸透の防止というよりも、むしろ社会秩序とその純粹さの維持にあったのではないかと。

このように考えるうちに、また、ここでリサーチを止めるわけにはいかない、という気がしてきた。こういった現象は、アメリカ史に限られたものではないと思いついたからだ。つまり、マッカーシズムは、アメリカ特有の現象ではなく、世界的な現象の一部なのではないかと。実際のところ、この朝鮮戦争期には、冷戦論理の名のもとでの「社会的粛清」が世界各地のさまざまな場所で同時多発している。例えば、中国の「鎮圧反革命運動」、台湾の「白色恐怖」、日本のレッドパージ、フィリピンでの「非フィリピン活動取締キャンペーン」、またイギリスにおける反労働運動キャンペーン——のようなものだ。

もちろんそれぞれの現象には、それぞれの地域に基づいた歴史背景があり、また言うまでもなく、各地でもたらされた暴力の度合いはそれぞれかなり異なる。また、これらの出来事を「社会的粛清」、つまり社会現象の一環として扱うことに抵抗を感じる向きもあるかもしれない。というのは、これらのすべては、これまで冷戦史観というレンズを通して分析されてきたため、通常は、グローバルな冷戦のローカルな結末、として描かれることが多いからだ。そこでは、普通の人びとは、国家の暴力の犠牲者、もしくはそれに抵抗しようとしたヒーローとして描かれることが多い。

しかし、僕にとって興味があったのは、そうした冷戦レンズを外して、これらの現象を見直してみると何が起きるのか、ということだった。なぜこのような国内パージが、世界中で同時発生したのか。それらに何らかの共通項はあるのか。一体どのような対立や分断があったのか。この時代の何を示しているのだろうか——。そこで博士課程中盤から後期にかけて今度は、世界各地の図書館やアーカイブスを旅してまわることになった。北京、上海、長春、香港、台北、東京、大阪、ニューデリー、ロンドン、オタワ、ハワイ、といった具合だ。振り返ってみれば、2005年にリサーチを始めてから2014年に脱稿するまでの9年間に、世界9カ国・地域で、総計58カ所の図書館やアーカイブスで資料収集にあたることになった。言うまでもなく、こうした旅行は、僕にとっては楽しみのもとだったから、「Global and Comparative Social History」という新しい領域を切り拓くような歴史家になれば、仕事と趣味を両立できていいのではないかとさえ考えていた。

実際、これらの無数のリサーチ旅行は、このプロジェクトを発展させるうえで極めて重要で建設的なものだった。これらを通して、僕は、各地で発生した「社会的粛清」の共通点を見出すことができるようになり、これらを別々の出来事ではなく、むしろ世界同時現象の一部として見ることができるようになったからだ。その共通点とは何か。冷戦言説のもとでの社会の「純化」と秩序の形成という作用だ。

4. 中国：「鎮圧反革命運動」再考など

ここでは簡単にいくつかの例を紹介したい。例えば、1950年の中国。マッカーシズムと比べると、かなり異なった例に見えるかもしれないが、中国でもまさにこの時期に「鎮圧反革命運動」という、中国国内における大規模なパージが始まる。このなかで約70万人が処刑され、約100万人が投獄されたと言われている。鎮圧反革命運動を「社会的粛清」、つまり社会現象の一環として扱うとなると、やはり抵抗感を感じる向きもあると思う。というのは、言うまでもなく、この運動は毛沢東の指示で、つまり中国共産党の政治運動として始まったからだ。しかし、誰が始めたのか、という点と、その後、社会で何が起きていたのか、というのは必ずしも一致しない。例えば、この「政治」運動も、数年もしないうちに、中央政府がもう終わりにせよ、と収束を呼びかけているにもかかわらず、地方ではどんどん処刑が続いて運動が一向に収まらないという事態になる。

ここで僕が考えたかったのは、共産党政権が始めたのだから反革命勢力を対象にしたパージに違いないと決めつけてしまって、それが何であるかを考えるのを止めてしまうのではなくて、より社会的な見地から——つまり社会のなかで実際に何が起きていたのか、という観点から——もう一度、物事の本質を考え直してみよう、ということだった。そのようにして見てみると、つまり、冷戦イデオロギーレンズを外して、何が起きたのかを再考してみると、やはり、それは単純な Political Cleansing Campaign（政治的浄化運動）だけでもなかったのではないかと気がしてきた。それよりも、むしろ、Social Cleansing Campaign（社会浄化運動）の要素を持つように転化したのではないかと。

この鎮圧反革命運動に関して、一つだけ例を挙げる。この例は、北京市档案馆で集めた資料を基にしたもので、北京市露天商組合が1951年春、どのように鎮圧反革命運動に取り組んだかを指し示すケースだ。興味深いのは、他の地域、団体でもほぼ必ずそうであったように、同露天商組合はこの「政治」運動を、組合員間のモラル向上、コミュニティー内の秩序形成の機会として、かなり都合のいいように作り替えて実施している。この組合の「鎮圧反革命運動」に関わるスローガンは、以下のようなものだった。

1. 納税期限を厳守すること
2. 常に領収書を発行すること
3. 公定の秤を使うこと
4. 顧客を騙してはいけない
5. 高値をふっかけてはいけない

6. 路上売店を常に清潔に保つこと

7. 小便、大便を道路脇や売店内でしないこと

一見して分かるように、中国共産党の反革命勢力に対する闘争とはあまり関係がない。ただ重要なことは、こういったローカルな取り組みが、「反革命勢力」を鎮圧するという国家運動の名の下で行われ、かなりの成果を挙げたという点だ。当時、この組合はこう主張していた。露天商は国内でもう一つの戦争を戦っている。それは中国経済を安定させ、社会秩序を作り出すというものだ、と。そして、どのように秩序を作り出すか、どのようにしてこうした決まり事を徹底させるかという、その地域のなかで、五つの家族が一単位になって、それぞれ違反がないかを監視しあい、もし違反があった際にはその五家族メンバー全員が処罰される、という仕組みだった。

この社会における相互監視システムというのは、非常に効率よく機能したらしい。もちろんその結果、処刑がたくさん出るのだが、当時、いったい誰が処刑されたのか、誰がその標的に挙げられたのかという点は、マッカーシズムの再検討と同様、かなり興味深い。というのは、この時、「肅清」の標的となったのは、元国民党黨員やその支持者だけでないからだ。（じっさい彼らの多くはいわゆる「留用」として元の職場に残ることが多かった）。そこに含まれるのは、むしろさまざまな人びと、例えば、日本への戦争協力者と見なされていた人であったり、戦乱期の間に地域で権勢を振るうようになっていた秘密結社（例えば「三合会」「青幫」「哥老会」）や、宗教団体（例えば「一貫道」）、ローカルギャング（例えば「黄牛」）のメンバーであったりした。また売春婦や売春斡旋業者、または普通の犯罪者や地域のごロツキ、放浪人なども含まれていた。

こうした人びとも、反革命思想を共有していたというよりも、むしろ、長く続いた内戦、抗日戦争といった戦乱期のなかに力を伸ばした新興勢力、もしくは、当時の社会的混乱を何らかの形で体现していた人びとと言えるかと思う。そう考えると、マッカーシズムの再考と同様、やはりここでも国共内戦と冷戦下でのイデオロギー対立の現れ、と決めつけてしまって考えるのを止めるのではなく、もっと社会的なレベルで、またもっとローカルなレベルで、どのような社会の軋みや歪みが生じていたのか、また地域社会内にどのような分断があったのか、もっと考えなくてはいけないと思う。

紙面の都合上、ここではフィリピン、台湾、イギリスなどのケースを紹介することはできないが、まとめに入る前に、ごく簡単に日本のいわゆる「レッドパージ」に少し触れてみたい。言うまでもなく、このレッドパージとは、1950年秋に本格化して、約1万3000人以上が一般企業から解雇されたものを指す。その名前が指し示すように、この出来事も、通常、冷戦レンズを通して語られてきた。一般的な説明は次のようなものだろう。ヨーロッパにおける冷戦の

開始とともに、アメリカ占領軍は、それまでの民主的、改革的な占領政策の方向を改め始めた。そして日本を東アジアにおける反共の砦として作り替えることにした。これが一般に「逆コース」と呼ばれるものだ。そして、この逆コースの一環として、それ以前に実施されていた公職追放を解除して、逆に共産主義者をパージした、それがレッドパージだ、とされている。しかし、この冷戦史観をベースにしたナラティブも、冷戦に対する見直しが進むなか、再考されていくべきだろう。

たしかに、1950年7月、朝鮮戦争勃発直後に始まった新聞業界でのレッドパージは、マッカーサーの指令で始まったとされ、それにより各地の全国紙、地方紙から総計約700人が解雇されている。しかし、同年秋に民間企業で広がり、1万人以上が解雇された、いわゆるレッドパージについては、GHQは実際のところ、何の指令も出していないし、その実施に関する示唆すらしていない。むしろ、『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき』で取り上げた新潟鉄工所における「レッドパージ」では、GHQ側は、むしろ解雇を取り消すように会社側に勧告している。（このケースに関しては、新潟鉄工所はGHQ労働課担当官の指示を無視して、従業員に口止め金を払ったうえで解雇に踏み切っている）。

これらの一般企業などでの広範囲な解雇に関しては、それぞれの会社、例えば、新潟鉄工所とか三井三池炭坑などが、それぞれの基準で始めたことで、その時、標的になったのは、特に驚くべきことではないだろうが、共産主義者というよりは、むしろ活発な労働組合員だったり、またただ単に「協調性がない」と思われた人びとだったりした。ゆえに、この「レッドパージ」と一般に想定される出来事も、「逆コース」自体の見直しも含めて、本格的に再考するべきだと思う。このあたりは、次の本のプロジェクトにも関わってくるので、またいつか別の機会に紹介できればいいと思う。

結語：社会的観点から冷戦世界を見直す

そろそろまとめに入りたい。ここでは、アメリカ、中国の例を中心に紹介したが、先に述べたように、こうした「社会的粛清」は世界各地で同時発生している。これらの出来事は、これまで別々に扱われがちで、さらには、それぞれが冷戦史観というレンズを通して観察されてきた。しかし、これらの現象の共通点と同時性の意味を考えているうちに、別々の出来事として捉えるよりも、一つのグローバル現象として見た方がいいのではないか、と思うようになった。その共通項というのはこういうものだ。

1. 同時性
2. 第二次世界大戦の経験

3. 「社会戦争」「文化戦争」の鎮圧
4. 人びとの参加
5. 冷戦世界の社会的必要性

まず、一つ目に、これらの「社会的粛清」は、ほぼ同時期の1950年秋頃に本格化した。その背景には、1950年6月に勃発した朝鮮戦争が、第二次世界大戦の記憶を呼び覚まし、それが第三次世界大戦の恐怖を煽り立てたこと、そして、それが、各地での戦時ムードと戦争フィーバーを巻き起こし、「社会粛清」を正当化していたことが挙げられる。二つ目には、この世界同時発生 of 国内パージを経験した社会というのは、いずれもが第二次世界大戦をかなりシビアに経験しており、それゆえ、それに伴った大きな社会変動と文化変動を体験していた。つまりこれらの社会は、第二次世界大戦という国際戦争だけでなく、それぞれの社会における社会戦争や文化戦争をも体験していたと言える。

三つ目には、これらの社会で起きた「社会粛清」は、そのいずれもが、多かれ少なかれ、そうした第二次世界大戦を通じて生み出されていた社会戦争、文化戦争を押さえ込む作用があったということだ。言い換えれば、それぞれの社会で噴出しはじめた異論や新興勢力を社会的に抑圧、抹殺することでその結果、その後しばらく続くことになる「ハーモニアス」で、「安定的」で、「秩序だった」社会を準備したと言える。四つ目には、そうした社会的粛清が、そのいずれもが、必ずしも上からの動員だけで成り立っていた訳ではなくて、下からの参加、いわば草の根保守層の参加が重要な役割を果たしていたという点が挙げられる。最後に、各地のそうした社会対立、文化対立を封じ込める際に、国家の安全保障という論理、つまり「反共勢力を食い止める」とか「反革命勢力に対抗する」といった冷戦言説が、極めて効果的に機能した点が挙げられる。

これらを総合していえるのは、朝鮮戦争期に各地で同時発生した「社会粛清」は、本質的には、社会秩序を取り戻そうとする草の根保守主義のバックラッシュではないか、ということだ。つまり、第二次世界大戦中とその戦後に起きた社会変動、文化変動に対抗して、「通常の」「普通の」「常識的な」状態を取り戻そうとする動きのことだ。このように見てみると、冷戦世界の本当の対立、本当の分断線は、東西キャンプの間にあったというよりも、むしろそれぞれの社会の内側であって、それらを乗り切るために、冷戦世界の継続が社会的に必要だった、と言えるのではないだろうか。そうした意味では、冷戦というのは、それぞれの社会において「秩序」を作り出すという作用を持つ巨大な「社会装置」だったのではないだろうか。

最後に、この研究が示唆する今後の研究の方向性、また今日の私たちにどのような意味を持つのかという点を考えて終わりにしたい。まず第一に、ここで示したアプローチは、同じ時代の別の場所の歴史を見直す際に有効だろう。このプロジェクトを通して、僕が試みたのは、言っ

てみれば、冷戦世界観というレンズを取り外して第二次大戦後の世界を眺めてみる、というものだ。『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき』が対象とする社会は、アメリカと中国、それに日本、台湾、フィリピン、イギリスなどに限られるが、このほかの地域、特に、これまで冷戦史観を通して語られることの多かった地域の歴史の見直しにつながるだろう。そうした地域に含まれるのは、例えば、フランス、イタリア、ドイツ。ギリシャ、トルコ、イラン。エジプト、ケニア、南アフリカ。タイ、ベトナム、カンボジア、インドネシア、フィリピン、韓国、北朝鮮。グアテマラ、チリ、アルゼンチン、メキシコ。あと言うまでもなく旧ソビエト連邦。こうしたそれぞれの地域における20世紀史を見直すことができるのではないだろうか。これはこの研究の同時代的もしくは共時的な応用と言えると思う。

この流れのなかで、僕は現在、編著2冊の出版を企画している。一つは、“Unlearning Cold War Narratives: Re-conceptualizing the Post-WWII World” もう一つは、“Reconceptualizing the Cold War: On-the-ground Experiences in Asia”だ。前者は、2016年に僕がNUSで開催した国際会議をもとにしたもの。後者は、2019年～2021年のプロジェクトで、アジアにおける冷戦と脱植民地化の歴史の見直しを眼目に据えたもので、普通の人びとの体験を中心にしたオーラルヒストリーアーカイブスを作ることを目標にしている。インド、パキスタン、ミャンマー、マレーシア、タイ、カンボジア、ベトナム、インドネシア、フィリピン、台湾、中国、韓国、日本、アメリカ、イギリス、フランスなどの研究者との共同プロジェクトで、これまで30人近い研究者との共同研究が決まっている。またこのプロジェクトのもとで研究を進めることになるポスドク2名の採用、PhD・MA大学院生計5人への学費等奨学金支援、また今年5月と6月のNUSでのワークショップ開催などが決まっている。

第二には、この冷戦史観レンズを外すというアプローチのより通時的な応用として、ある特定の地域のより長いスパンの歴史を再考する際にも有効ではないだろうか。例えば、日本の1920年代から50年代までの歴史は、普通、国家戦争を主軸にして語られてきた。それゆえ、戦前、戦中、戦後、というように時代区分して、1945年に大きな分断があったことになっている。ただ、そうした大きな物語、つまり国家間戦争という大きな物語のもとで、絶えず繰り返されてきた、もっとローカルで、もっと社会的な対立、分断、軋みなどに注目してみると、このよく知られた時代も、もっと違ったように分析することができるのではないだろうか。日本の現代史も、軍部の台頭、戦争、占領、冷戦、逆コース、経済発展という一般的なナラティブではない歴史を書くことができるのではないだろうか。この流れのなかで、これまでに、“The Social Experience of War and Occupation”という一章を、このほど30年ぶりの改訂となる新たな*The Cambridge History of Japan*に向けて執筆した。このアイデアを次の本のプロジェクト、“Purity and Order: Reconsidering Patriotism and Anticommunism in Wartime and Cold War Japan (仮題)”で、今後、より発展させていきたい。

第三に、おそらくここが、最も重要な点でもあると思うが、この研究が示唆している、冷戦をより根本的に見直すという試みは、究極的なところでは、「現実」とは何か、「歴史」とは何か、そういったものは現在の社会でどういうふうになられて、どのように作用しているのか、という点を考えることにつながると思う。というのは、「現実」にしろ、「歴史」にしろ、良きにつけ悪しきにつけ、要は、複雑極まりない事象を、分かりやすく、簡単にして、パッケージとして提供するという作用をもっている。

ゆえに、悪い言い方をすれば、「現実」にしろ「歴史」にしろ、それは一種の思考停止装置にもなりかねない。実際のところ、冷戦という「現実」は、当時、右派、左派、もしくは中立非同盟の立場をとった人びとにとってもある意味、便利で都合の良い思考停止装置だったとも言える。ゆえに、そうした「現実」が、当時、どのようにして社会的、歴史的に構成されたのかを知るということは、つまるところ、僕らが日々、感じる場所の「現実」も、客観的情勢というよりは、社会的構築物に過ぎないと気付くことにつながると思う。

したがって、『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき』が、今日の読者にどんな意味があるのか、という点を一言で示すとすれば、それはどんな「現実」でも——それがテロとの戦いだったり、もしくは男らしさ女らしさをめぐる社会規範であったり、さまざまな世界の現実、社会の現実があるだろうが——そういった「現実」とか「常識」を、そのまま鵜呑みにしない方がいい、分かった気にならない方がいい、ということだと思う。やはり、それぞれが自分自身で、いったい何が「現実」なのか、ちゃんと考えつづけていく、その上でその「現実」が何かおかしいと思ったら、何か変だよ、と少しずつでも声を上げていくことが大切だ、ということになると思う。というのは、冷戦世界という当時の世界の「現実」を作り上げたのが、まさに無数の普通の人びとだったように、今日の僕たちの世界の「現実」とか、常識とかを作り上げているのも、やっぱりそうした普通の人びと、つまるところ私たち自身なのではないか、と思うからだ。

ここで簡単に内容を紹介したことで、近刊の拙著『人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき』により興味を持っていただき、なんらかの形で今日の世界や社会のことを考えるきっかけになれば非常に幸いに思う。

The Cold War among the Ordinary People: When Imaginations Became the Reality of the World

What was the Cold War? A simple definition might be: a post-WWII international confrontation between the Soviet Union and the United States, which involved, first, Europe, and then Asia, Latin America, and Africa, eventually dividing the world into two camps. The key players generally identified are high-ranking policymakers, including Harry S. Truman, Winston Churchill, and Joseph Stalin. Of course, we know this story. However, the full story is not so simple. It is time to change our ways of thinking about the Cold War.

My forthcoming book, *Hitobito no naka no Reisen: Sozo ga gurobaru na genjitsu to naru toki* [*The Cold War among the Ordinary People: When Imaginations Became the Reality of the World*] (Tokyo: Iwanami), is an inquiry into this peculiar nature of the Cold War. It examines not only centers of policymaking, but also apparent aftereffects of Cold War politics during the Korean War: suppression of counterrevolutionaries in China, the White Terror in Taiwan, the Red Purge in Japan, the crackdown on “un-Filipino” activities in the Philippines, and anti-communist and anti-leftist movements in Western societies, such as anti-labor agitation in the United Kingdom and McCarthyism in the United States.

Such purges were not merely end results of the Cold War, I argue, but forces that brought the Cold War into being, as ordinary people throughout the world strove to silence disagreements and restore social order in the chaotic post-WWII era under the mantle of an imagined reality of global confrontation. Revealing social functions and popular participation, my research highlights ordinary people’s roles in making and maintaining the “reality” of the Cold War, raising the question of what the Cold War really was. This article introduces the main questions and arguments of my forthcoming book by tracing how this project developed over time during the last decade or so.

(MASUDA, Hajimu, Associate Professor, Department of History, National University of Singapore)